

## 成果報告書

教育研究課題名	筋筋膜性口腔顔面痛患者の口腔内体性感覚の評価
---------	------------------------

### 1、補助事業の取組状況（500字以内）

口腔顔面痛患者の診査・診断において、誤診を防ぐために包括的な検査は非常に重要である。口腔顔面痛と一次性頭痛との併存、歯への関連痛や二次性頭痛の誘発、頸肩部筋痛から口腔顔面痛の誘起などは臨床でしばしば見られる事象で、痛みの複雑性や診断の難しさの要因となっている。この点において、三叉神経の体性感覚評価であるQuantitative Sensory Test (QST)は、口腔顔面痛患者の診断に有用な検査で信頼性がある。QSTは主に口腔外で行われており今まで口腔内の評価はほとんど行われていない。また、QSTは高価な機器とその検査に熟練と時間を要するため、大学や一部の病院でしか検査が行われていない。そこで今回、一般の歯科医院でも使用しやすいchairside qualitative somatosensory testing (QualST) やsimple quantitative sensory testing (sQST)を用いて、口腔顔面痛患者の温熱刺激や機械的刺激に対する口腔内も含めた体性感覚を検討した。感受性を筋筋膜性口腔顔面痛患者と健常被検者、また筋筋膜性口腔顔面痛患者の疼痛側と非疼痛側とで比較した。さらに、QSTも施行しQualSTおよびsQSTとの一致度を評価した。

### 2、補助事業の成果（500字以内）

被検者として健常被検者48名(25.7±5.4歳)、ICOP分類の慢性頻発性一次性筋筋膜性口腔顔面痛に該当する患者17名(26.3±7.8歳)を採用し、咬筋、側頭筋、下顎第一小臼歯の頬側歯肉、手掌を対象にQualSTおよびsQST、QSTを行った。また、合わせて心理社会的評価を5種類の質問紙票を用いて行った。sQSTの結果に対してZscoreで評価したところ患者群の咬筋、側頭筋、頬側歯肉、手掌に対する温熱刺激、機械的触刺激、機械的疼痛刺激に対して感覚過敏が認められ、ワインドアップ比率にも健常群と比較して異常が認められた。筋筋膜性口腔顔面痛患者において痛みのある局所の咬筋部だけでなく三叉神経支配の他部位（側頭部、頬側歯肉部）や、脊髄神経支配の部位（手掌）にも感覚の変化がみられたことは、中枢性感作（Central Sensitization）が関与していることが示唆された。本研究は派遣先のオーフス大学（デンマーク）とカンピーナス州立大学（ブラジル）との共同研究であり、現在、論文投稿の準備中である。

所属	職名	氏名
歯学部 歯内治療学講座	准教授	稲本 京子